

「家族のこと①」

私の背景についてお伝えするため、しばらく家族のことを書きます。
【父のこと】

私の父は堺出身で私の本籍も堺市榎屋町。その住所に今は NTT の建物があり、現在ザビエル公園のある所に家があったそうです。江戸時代からの木工職人で、近所に与謝野晶子の実家もあったようです。戦前は木工所を営み、近くの堺刑務所に作業場も提供していたそうです。木工所は父が6才の時、堺の空襲で燃えてしまいます。父は空襲後、防空壕から燃えた家へ帰る道で、焼け野原で遠くまで見通せるようになった堺の町の風景に、将棋の駒の様に五角形のタマノ茸酢の工場の防火壁が立っていたのを憶えているそうです（ちなみにアメリカ軍はこの堺空襲で残った焼夷弾を貝塚に落としました。あちこち燃えましたが、二中校区の圓光寺あたりで死者がたくさん出たそうで現地に碑が建っています）。祖父は財産が燃えたことにショックを受け、少しばかり残っていた土地などもお酒にかえて飲んでしまったそうです。

父は月州中学校から三国ヶ丘高校に進んだ後、家にお金がなかったので働きながら学べる夜間大学へ進学します。友人の多くが昼の大学に行くので悔しかったそうです。だからなのか父は三国の卒業生であることをやたらに誇りに思っていて、八期生の同窓会を毎回楽しみにしていました。「三国の同窓会名簿は堺の紳士録だ」等、様々な意味で問題のある発言をしていて、私はとても嫌な気持ちだったことを今でも憶えています。私にも「三国に行け」と言っていました。私の成績を見て何も言わなくなりました。そこにしか自分のアイデンティティを保持できない父の苦しさを当時は理解できませんでしたが、私の中に気持ちを聞いてもらえないことへの反発は根強く残りました。

当時はまだ偏差値至上主義で、少しでもいわゆる「良い学校」に行くことで、(入学試験で合格さえすれば) その高校のブランドがその子の力を伸ばし、将来を保障してくれると錯覚していたように思います。今、大学進学率は5割を大きく超え、さらに短大、専門学校などを含めた高等教育進学率は85%に届く勢いです。逆に高校進学後の中退も近年増加傾向です。やめる生徒は1.5%程度なのですが、やめる理由

の35%が「進路変更」もう35%が「不適應」です。中退する生徒の実に7割がその進路の方向もしくは高校が自分と合っていなかったというのです。「行ける学校」でなく「行きたい学校」を選ぶ重要性を感じる数字です。見たこともないのに点数のランクで志望校を決めるのではなく、本人の気持ちを大切にしながら、早い時期に様々な方面から「行きたい方向」「学校」を増やし、入学後もモチベーションが維持できるかどうかも見極めて、その中から保護者と共にじっくり選び決定していく、その過程を学校も大切にしたいと考えています。

まずは「何を目的に何をするのか」が大切です。本校ではキャリア教育で自分の「したいこと」をじっくり考えます。現在2年生で、企業に協力をお願いしポップコーン販売の戦略を練る体験を通して自分の適性や「したいこと」を考える取組みを進めています。

入試を突破する学力についても、入るときに余裕があって高い成績を維持できる見込みのある高校の方が頑張れる子もいます。ギリギリ入れる学校を選ぶことは、グンと伸びる可能性があるかわりに3年間ずっとしんどくなるリスクもあることをふまえて取り組んでいきます。

さて、父の話に戻ります。父には兄がいましたが、不慮の事故で亡くなり、突然、跡継ぎになります。仕方なく祖父の仕事を継ぐことも考えたそうです。その頃の主力製品は木製の包丁の柄（堺は刃物で有名でした）で、儲けは薄いし、かといって大量生産したら、すぐ全家庭に行き渡って行き詰まるだろうし、何といたっても従業員の給料を毎月出すことの苦しさに耐えられないと考えたそうです。結局店をたたみ、ガラス器の会社に就職します。働きながら通った夜間大学を卒業する時に、安定が一番と考え、公務員試験を受けます。会社を辞め、当時、父には最先端の仕事に思えた「京都大学付属原子炉実験所」（この名前はノーベル賞博士湯川秀樹がつけたそうです）を選び、技官（理系の事務員のようなもの）として勤めはじめます。

ようやく仕事が安定し、父はお見合いで母と出会うことになります。

【不定期コラムNo.13】へつづく

第三中学校ホームページ

では、子どもたちの様子やお知らせなど情報発信しています。ぜひご覧ください。これまでの不定期コラムも「校長室より」のコーナーでご覧いただけます。

<http://www.kaizuka.ed.jp/dai3-jh/>

貝塚第三中学校HP



貝塚第三中学校HP